
憎しみの世界平和

神猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憎しみの世界平和

【コード】

N6665M

【作者名】

神猿

【あらすじ】

戦乱続くファンタジックな世界に生きる、直情径行で正義感溢れる少女、マール。

彼女が世界平和のために目覚めさせたものは、悪の権化のような男であった。

起動

雨が、降っている

五人ほどの集団の先頭にいる少女は、空を見上げ鬱陶しそうな顔をした。

可愛らしい少女である。

ともすれば人形のような顔に深青色の瞳が輝いており、意思の強さが窺える。

雨に濡れているとは思えないほど美しい金糸のような髪で結った一房のお下げが揺れるたびに、小柄な体躯に纏った無骨な鎧が音をたてる。

「外に出てしまったか…」

これまた綺麗な声で呟いた。

独り言なので答える必要はないが、後ろに続く男達に答える元気は残っていないようだ、

一人を除いて。

「そのようですね。道を間違えているわけではないと思うのですが…」

青年の声だったが、数々の修羅場をくぐってきたと思われる雰囲気
が滲み出ていた。

「夜になっていたようですね。もうどれくらい歩き続けているかも
分かりませんが」

「そうだな、そろそろ見つかったもいいと思うんだが…ゼクストは平気か？」

「御心遣い、痛み入ります。ですが私がマール様より先に音をあげるわけには参りません」

青年　ゼクストはそう答えた。

一行は『終戦の神殿』と呼ばれる遺跡を歩いている。所々石の風化が始まり昔の荘厳だったであろう姿は見る影もない。

少女のうんざりしたような声が表しているように、歩き続けてそろそろ一日になる。段差や階段なども多い上真つ暗なので、松明で足を照らしながらという確かに歩みの遅いものだったが一日はかかりすぎだ。

そしてなぜこの一行はこんなところを歩いているのか

それは少女が旅をする理由にあった

少女　名をマール＝ロンドという少女は、裕福な家庭に育ったいわゆるお嬢様であった。

父は数々の武勲や伝説をもつ英雄であり、母は優しく美しいという理想的な親の背中を見て育ったマールは、当然のように素晴らしい娘に育った。

父との稽古で培った並の男では到底敵わない剣の腕、母譲りの容姿、そして二人から受け継がれた優しさと正義感。

そんなマールの14の誕生日、平穏な日々は終わりを告げた。

大陸間戦争

北のルクレツィア大陸同盟軍と、南のファルディナ大陸連合軍の戦争。期間は短かったが戦いは熾烈を極め、死者は数十万から未確認含め数百万とも言われ、今でこそ和平が成っているがそれが薄氷の上の事であるのは誰の目にも明らかである。戦禍の傷跡も各地に色濃く残っており紛争も多発している。

マールは当時家で使用人だったゼクストに連れられ、父に渡された家宝を持って逃げた。

マールはその戦争で父母を失った。
「痛っ」

マールが小さく声を漏らした、どうやら目に雨が入ったようだ。普段ならその程度で声を上げたりはしないのだが少しポーツとしていたようだ。

「どうしました!？」

ゼクストが焦ったような声を出した。心配性というか過保護というか。

「ああ、気にするな。問題ないよ」

「そうですか？ …無理はしないで下さいね」

「ああ……………ん？行き止まりか？」

目の前が壁になった。

「えっ！一本道だったはずなんですが…」

「いや、これはただの壁ではないな」

少し見ればその壁の異質さは明白だ。まわりはボロボロの石造りだ
というのにその壁は傷ひとつない。

「どうやらこの奥のようですね、遺産《レガシィ》があるのは。」

「恐らくな…しかしどうやって先に進もうか。」

マールが何気無く壁に触れたその時

「ッ!？」

腰に差した Rond 家の家宝にして父の形見の剣 レストレアスが
震えた。

「お嬢様？」

何かありましたかと訊ねるゼクストを無視して、マールはレストレ
アスを構え、壁を真っ二つにするかのように振り下ろした。

するとその壁に
なんの変化もなかった

「…あれ？」

誰のつぶやきだったかは定かではないがその場にいた人間の総意だ
と思われる。

もっとう、壁が崩れるとか消えるとかそついう変化を期待してい
たのに、見た目にはなんの変化もない。

そう、見た目には

剣を振り下ろした姿勢で固まっていたマールは、おもむろに剣を納
めるとゼクスト達の前から姿を消した。

マールが壁に向かっていったと思ったなら壁に吸い込まれてしまっ
たのである。

「マール様ッ!？」

ゼクストが壁に駆け寄るが彼にとっては依然としてただの壁であっ
た。

「くそつ!ご無事ですか!?マール様ッ!」

ゼクストの叫びがむなしく響いた。

マールが意識を取り戻したときに感じたのは、一面の白だった。前後上下左右、見渡す限り真っ白な空間にマールは一人佇んでいる。

「ここは…？」

あまりに突拍子もない展開に整理をつけるため、マールは目を閉じ起きたことを反芻した。

（少しあやふやなのはあの妙な壁に触れた後か…その後の事は…分かるんだが自分の事とは思えないな）

考えても仕方がなさそうなので思考の海に沈むのをやめ、目を開く。

すると目の前に石碑が浮いていた。

「…？」

突然現れたことに困惑しながらも石碑に向かう。視覚的には浮いているんだが床の感触があった。

石碑にはなにも刻まれてはいなかった。

これでは単なる岩だ。

またしても困惑させられるマールの頭に声が響いた。

憎め

「ッ！」

声…というより文字がそのまま頭に浮かんでくる。

憎め、平和を求める者よ

「何者だッ！」

マールは剣を抜き辺りを見回すが誰もいない。

平和を望むなら、悪を憎め

「お前が誰かは分からないがそれは違う。一方を悪と決めつけるから憎しみが生まれ、争いが起こるんだ。」

悪に情けをかけてはならん

その心は破滅を導く

「だから違うと…ッ!?!」

突然、目の前の白が強くなり目を開けてられなくなった。

ああ、この空間から出るんだな、という漠然とした予感。

その胸に到来したのは

憎め。憎み続ける

なんとも気分が滅入る言葉だった。

「……………」

ゼクストは誰が見ても分かるほど沈んでいた。

（お嬢様：大丈夫だろうか：お一人であんな得体の知れない所に行ってしまうれて：私がお守りしなければならぬというのに：それがお嬢様が幼少の頃よりの私の使命。ああ、それにしても幼少の頃のお嬢様の可愛らしさと言ったら天使のようであった、いや天使などメではないな）

心配のしすぎで思考がトンでいる。

「そう落ち込むなって、なーに、嬢ちゃんなら大丈夫さ」

「そうですよ」

体育座りで今にももの字を書き出しそうなゼクストを慰めるのは、見るからに活発な少年と落ち着いた雰囲気少女の少女である。

少年の方は、名をソルエルといい跳ね気味の灰色の髪と長い犬歯が特徴的である。

少女はサリア、長い白髪や表情の薄さが神秘的な雰囲気を漂わせている。

二人とも年の頃はマールと同じくらいだ。

「嬢ちゃんもガキじゃねえんだしいいかげんに：って聞いちゃいね

え

「そうですね」

ゼクストはブーツブーツと何か呟きながら時おり恍惚とした表情を浮かべ、完全にアブナイ人と化している。

「これさえなけりゃ頼れる兄ちゃんなんだが」

「そうですね」

二人は呆れながらゼクストを見下ろしている。

「帰ったぞ」

「いや、今現在のお嬢様もお綺麗になられた。愛らしさを残しながらもお美しくなられてまさに美の女神イーノ・マータも裸足で逃げ出すほど。そしてさらに、ってお嬢様アッ!!」

「うわっ!!」

ソルエルにはマールの声は聞こえなかったので突然の叫びに驚いている。サリアはよく分からない。

あれほど深く沈んでいたゼクストは一瞬で帰還した。ちなみにゼクストの名誉のため言っておくが、小一時間ほど容姿を褒め称えた後しっかりと内面も褒めちぎるハズであった。

「お怪我はありませんか!? 頭痛かったりは!? 体調悪かったりとかしません!? とにかく大丈夫でしたか!?!」

「あ…ああ、問題ない」
結構慣れっこなハズだが若干引き気味である。

「それと、遺産《レガシイ》はここにはないようだ」

遺産《レガシイ》

字の通り、前時代の遺産である。

今より400年ほど前、文明は今の数十倍とも言われる水準であったとされている。機械文明もそうだが特筆すべきは魔法文明である。今では奇跡でしかない現象が世に溢れ、飢えや貧困の消えた素晴らしい時代だった。

魔王が反旗を翻すまでは

魔王は元々その文明が隆盛を極める理由となった魔法を作り出し、政府に献上する役職に就いていた。

それが突然反乱を起こし、たった一人で世界に齒向かったのである。数量的には断然不利であったが、魔王の名に相応しい魔法技術は世界軍の遙か先を行く上に、戦争用の魔法まで開発され世界軍は為す術がなかった。

しかし世界軍もされるがままではなく、密かにあるものを造り上げた。

Produce A Cease-fire System 通
称^{ピリス}PEACE Systemと呼ばれる兵器である。

その兵器が魔王との戦争を終わらせたのが、この『終戦の神殿』と言われている。そして存在意義を失った兵器が眠っているとも。

マールは、今の荒れた世界を正すヒントだけでもないだろうかと思われたのであった。

「そうですか…ですがマール様も兵器に頼るのを良しとはしていませんでしたのでちょうどよかったのでは？」

「むう…」

確かに平和を望みながら兵器に頼るのはどうかというところもあったが、やはり残念である。

とりあえずこれ以上雨に濡れるのもイヤなので、遺跡探索の拠点としていた村に帰ろうとして

サリアが壁の方を凝視しているのに気付いた

「？」

釣られて向いた視線の先に、人影が見えた。

起動（後書き）

アップがとてつもなく遅れました…っ、疲れた。

携帯で書いているんですがやっぱりキツイです。何故この情報世界に我が家は取り残されているんだ…！（要はネットに繋がってないんです）

こんな…こんな日本に誰がした！？

麻生め…！（責任転嫁）

他に携帯で執筆なさっている先達の方々、なにかコツのようなものを教えていただけると、う…嬉しくなんてないんだからねっ！

崩壊

「お前らか、俺を起こしたのは」

いきなり人影が問いかけてきた。

「そ…そうだ！あなたがその昔世に平和をもたらしたのか!？」

急展開に戸惑いながらもマールが応える。

「ああ…まあそんなことした憶えもあるな」

気だるげに、そしてその記憶を悔いているかのような声音に多少疑問を抱きながらも、マールは言葉を繋げる。

「ならば私達とともに世界平和のため働いてはくれないか？」

「ああ？」

不快感をあらわにした声が出た。人影が近づいてくる。輪郭しか解らなかつた姿が松明の炎に照らされる。

兵器という話から抱いていたイメージと違い、普通の人間と変わらない姿をしていた。

少年の風情を感じさせる引き締まった体躯に、妙な服装…例えるなら騎士のような格好をしている。そして端正な顔立ちには嫌悪感が貼り付けられている。

「世界平和？正気か？」

「なっ…!!」

今まで、世界平和という夢を笑われたり、嘲られたりしたことは何
度もあるが、ここまで見下されたことはかつて無い。

「何故平和を求めることを否定するんだ！貴方もそのために造られ
たのではないのか!？」

激情に任せた言葉を叫び、相手の黒より昏い蒼をした瞳を見返す。

「はっ、下らない。目の前の平和すら疎かな小娘がナマ言ってんじ
やねえよ」

その言葉は背後から聞こえた。

「「「え?」「「「

瞬きの間に移動したかのような状況に、皆が揃って間の抜けた声を
発する。

理解が追いつかない様子のゼクストの目前で、男は手をゼクストの
顔に向ける。

次の瞬間

ゼクストが消えた

いや、正確には後方に弾け飛んだのだ。人間が飛ぶにはあり得ない
速度で。

ガシャアッ！！

あのスピードで壁にでも叩きつけられたら…というマールの危惧が現実の物となった音がした。

「待つ！」

待てという言葉すら言えずに、ソルエルは消し炭に、サリアは氷漬けにされた。

「解ったかよ、お前の思う平和なんて脆いモンだってことが」

「あ…」

「解ったらお前も消える」

茫然自失としていたマールに手が伸びる。

「…」

そのまま少し止まった後、男は悪魔のような笑みを浮かべ

「そうだな…お前には起こしてもらった恩もあるし、世界平和とやらを実現してやるう」

「へい、わ？」

「そうだ。喜べ、完璧な世界平和だ。飢餓も貧困も格差も争いも、悲哀や絶望すら無い」

「…」

マールは、想像した。
そんな幸せな世界を。

常に理想であつた世界、しかし心の何処かで所詮理想でしかないと諦めていた。それをこの男が現実のものとしてくれるのか。

「つまりは」

そんな少女の儂い希望は

「全人類の死滅だ」

粉々に、打ち砕かれた

「仕方ないよなあ？人間つてのは無意味な争いや格付けが大好きな生き物なんだからよ」

「国だの宗教だののまとまりの中で偉いやツラの気分一つで戦いが起きる」

「個人間だつてそうさ、下らねえ事で人は憎しみ合い、奪い、殺し、また憎む」

「そんな世の中でお前の理想を叶えようってんならもう滅びるしかねえやな」

「この世界にたった一人になった時、その平和な世界でお前はど
うするんだろうな？」

男の口からは次々と言葉が流れてくる

「……………」

マールは、肩を震わせ何かを呟いている。

「ん？なんだって？」

男が耳を寄せる

「……………」がっ

「ん〜？」

「違っッ！…！」

しっかりと男を見返し、叫んだ。

ピシッ

「確かに、お前の言った通りかもしれない！人の心は容易く悪に染
まる」

メキ…

「それでも人はその間違いを正すことができる。愛し、赦し、敬い、慈しみ、信ずることができる」

ビキビキビキ

「そういう人の繋がりの中に平和があるんだ。お前の言ってるのは平和じゃない！ただの逃げだ！！」

パリーン！

マールは困惑していた。それというのも

「どうかされましたか？」

ゼクスト達が生きているのだ。先程啖呵を切ったことは覚えている、しかしその後気付いたら死んだ筈のゼクスト達は傍にいた。

「ほー、幻術を破っちまいやんの」

男は面倒くさそうな、それでいて嬉しそうな表情だった。

「幻術…だと？」

「そうさ。愉快的な夢が見れただろ？」

「なっ！、何が愉快的なものか！」

「あーハイハイ、うるっせえなもー」

「……………」

マールは一見落ち着いているようでかなり怒っている。マールの怒気はゼクスト達にも感じられた。

「何の目的があってあんな趣味の悪い幻術にかけた？」

「目的？どーでもいーだろそんなことは、破ったんだしよ。それはそれで結果オーライだがめんどくさいので俺は寝る。」

そう言っつて男は横になった

「……………」

もう我慢ならないようである

「なんだキサマ！その人を小馬鹿にした態度は！」

「うるせえっつてんだよ、一分以内に消えねえとじきじきに消すぞコラ」

「やってみる！このマール」ロンド、出会い頭に人を幻術にかけるような卑怯者には負けん！」

男の肩がピクリと動いた

「マール……………ロンド？」

「そうだ！由緒正しきロンド一族の正当な後継者であらせられるのだぞ！」

何故かゼクストが言う

「……まさか」

男は先程とはうってかわって真剣な様子だ。そしてまたしても突然にマールの目の前から姿を消した。

「起動してやがる……」

その声はすぐ傍から聞こえた。そしてその手にはマールの剣　レストレアスが握られている。

「返せッ!!」

さすがにそこまで驚かなくなったマールが飛びかかるが、男は難なくいなす。

「チイツ!!」

間合いを離れた男は、忌々しげな舌打ちと共にレストレアスをマールの足下に投げた。

「事情が変わった」

男の雰囲気は変わった

「全員此処で死ね」

悪鬼のそれへと

男が無造作に手を振ると、凄まじい風が生じ、マール達を襲う。

「ぐうっ！」

しかし、マール達もそれなりに強い。強風に耐えて戦闘態勢を整える。

マールは剣を、ゼクストは盾を、ソルエルは鉤爪の付いた手甲を、サリアは薙刀を構える。

「んー…なんか話聞いててもよく分かんなかったが、アイツは敵なんだな？」

「…」

「ぐあっ!?!」

頭の悪さを露呈したソルエルの鼻っ面を、サリアの得物の柄が叩く。

「コントやってないで行くよ!」

マールの号令で一斉に攻勢に出る

が、

「へっ」

男はひとつ笑うと、宙に浮いた。

「よく考えればお前らと同じ土俵で戦ってやる必要もなければ、直
接手を下してやる必要もないか」

言つて、男は天井に向かって手刀を放つ。

何も無い空間に放つた筈のそれは、確かな質量を持ったなにかを天
井にぶつけた。

「きたねーぞ！降りてこいやあ！」

松明の光が届かない所まで浮上した男にソルエルが吠える

「やはり卑怯者だな…ん？何の音だ？」

天井からドオンという音がして、次いで何かが地面に落ちる音がす
る。

「よう馬鹿ども」

「降りてきやがったな！？よーしそのまま手の届くところまで来い
！あっ！なに止まってんだ！降りて来イベツ！！」

「……」

馬鹿どもに反論できないからやめてと言わんばかりの一撃が決まる

……………「コトコト」

「まあここは地下なわけだ」

「そんなことどうだっていい！降りてきて戦え！」

「ハイハイ、後で遊んでやるよ」

「~~~~ツー！」

もうイライラは頂点だ

……………ゴゴゴゴゴ

「で、この真上には湖がある。お前らが雨だと思ってるのは湖の水が染み出してきているものだ」

「だから!?!」

「天井に大穴開けてきた」

「「……………え?」」

「溺れ死ねや。じゃあな」

「ちよっ」

ドツパアアアン!!!

横合いからの鉄砲水に、マール達は押し流された。

崩壊（後書き）

すみません、ちょっと補完します

松明はマールが壁の向こうにいる間に立てていました。持ってなくてもそれなりに見える程度に

なんかまだ名前も出してない男が悪役っぽくない…単に口悪いだけじゃね？という感じが否めない

始動

揺れている

何か、大きく温かいものに包まれて

この感覚は前にも感じた

そう、あれはたしか

「ッ！ゲホッ！」

マールは目覚めた。多少水を飲んでしまったようでもせかえってはいないが無事である。

真っ暗なのでとりあえず魔法で松明の代わりの明かりを灯す。

「そつだみんなはッ!？」

慌てて辺りを探すと、全員近くに転がっていた。

「おい！しっかりしろ！」

ゼクストの頬を往復ビンタ。痛そう

「う…ぐ…」

「起きろってー！」

肩をつかんでガクガク。後頭部連続強打

「だ…だいじょうぶですから」

「そうか！よかった…他のみんなは!？」

ソルエル達は正座していた。朦朧とした中でゼクストの惨殺…もとい気付けシーンを見て一気に目が覚めた次第だ

「俺らはこの通り無事ですから!」

(コクコク)

「そうか…よかった」

「しかし、なぜ助かったんだろうか」

「お嬢様、こちらをご覧ください」

ゼクストの声は横穴の奥から聞こえてきた。横穴を進むとゼクストが立っており、そこから先は崖になっていた。

「少しひいたようですが下の方には水がまだ流れています。恐らく流されている途中に先ほどの場所に流れ着いたかと」

「ふむ…」

「おーい！」

ソルエルの声がする

「どうした？」

「こっちから風が吹いてるってサリアが」

(コクリ)

「そうか、でかした！これでようやくこの遺跡から出れる」

全員サリアの先導で横穴を進むと、道の先に光が見えた。

「出口…ではないか。壁の隙間から光が漏れているようだな」

「お嬢、さがってな。俺がぶち破ってやつから」

ソルエルは助走をつけ、壁にタツクルをかました

ドガシャア！！

壁はいとも容易く崩れ、大穴が空いた。

「うわっ！」

「眩しッ」

ずっと薄暗い遺跡の中にいた身には日光は厳しい。マールとゼクス
トは目を覆い、光に慣れるのを待った。

何故かサリアは平気そうである。盲目ではないはずだが…ソルエルはタツクルした時頭を打ったのかのびている。

目が慣れるにつれ、視覚が戻ってくる。そして気付いた

外に立つ男に

「よう。生き汚ねえ奴等だな全く」

マールはその姿を捕らえるや否や、剣を抜いて斬りかかる。

「やああっ!!」

「おーおー、元気一杯だなオイ」

男はおもむろに足下の木の棒を拾い、マールの斬撃を受け止めた。

「な…に!?!」

「甘えんだよ。初孫に直面した爺さんぐらい甘え」

マールは自分の剣の腕に絶対の自信を持つてゐるわけではないにしろ、それなりの自負はある。少なくとも、全力で打ち込んであの細い枝すら両断できないような情けない実力ではない。とすると…

「言つとくが、枝に細工なんか無いぜ。ほれ」

ダーツの矢のごとく放たれた枝を叩き落とす。枝は木端微塵だ

「まあそついきり立つなよじゃじゃ馬ちゃん」

「だったらそれをやめろ！その態度を！」

「そりゃ無理だ。なんかアンタは馬鹿にしたくなる」

「前々から黙って聞いていればなんたる無礼！今すぐお嬢様に頭を垂れる！」

「さつきはロクに戦えなかったからなあ、再戦といこうぜ！」

ゼクストとソルエルが戦線に参加する。

「待てつて、折角お前らの悪運に免じて見逃してやるうつーのに何を死に急いでんだ？」

「何？」

「馬鹿なことを。今さら怖じ気づいたか」

「お前からこそ何勝てる気になってんだ？ちゃんちゃらおかしくて腸捻転が起きそうだ。」

雰囲気が変わった

この感じは

マールの生存本能が警鐘を鳴らす。他の二人も微動だにできない。

「お前、あれが現実では出来ないとしても思ってたのか？」

マールの脳裏にありありと浮かぶ、惨たらしい三人の死に様。

「いいんだぜ？今すぐ消したつてよ。そこを助けてやると言ってるから大人しくしてな」

「結局…どうしたいんだ…お前は」

息も絶え絶えといった風情でマールが問う

「俺はお前が気に入ったよ。そして俺は気に入った相手にはそいつが嫌がることをしてやるのが好きだ。よって…」

「お前の大っ嫌いな、戦争を起こしてやる」

「俺の力で何も分からないまま滅ぼすのはつまらん！ならば人の憎悪という醜悪極まりないもので世界を満たしてやる！」

「狂ってやがんぜ…ここで死んどけや！」

ソルエルの鉤爪が男の喉を裂く。

「そのようなこと、させるものか…！」

マールの渾身の一撃が男の体に降り下ろされる。剣は男の体に吸い込まれ、肩から腹にかけてバツサリと両断した。

「殺った！」

マールの手に残った手応えは、ソルエルの言葉に反してとても虚しい物だった。

「あーっはははは！！」

男の大笑いはどんどん遠くなり、悪魔のような顔が見るからに薄くなっていく。

「消え…た？」

ゼクストは驚いたようだが、マールは「だろうな」

という心情だった。今更消えることに驚きはしないし（現代では十分驚くべきことだが）ヤツがそう簡単に死ぬ筈もないと分かっていた。

「皆」

マールは剣を納め

「とりあえず、街に戻って休息をとろう。今後の事はその後だ」

凜とした笑顔でそう言った。

とりあえず最寄りの街の宿屋に泊まり、一晩たった翌日、一行は酒場に居た。

「さて、今後の私達の動きについてだが…あの男の計画を止める。これに異論はないな？」

一同頷く

「これからあの男と戦っていくわけだが、いつまでも『あの男』と呼んでいてはやりづらい。そこで我々で名前をつけよう」

「名前…でございませうか」

「そうだ。ちなみに私の案は、見た目が全体的に黒かったから『ク
ロ』だ」

「…」

ゼクストはマールのティーカップに注いでいた茶をこぼしそうになった。

「いいねえ！でも『スーパー』とかけたらスゴそうじゃねえか！
？」

「え〜？…」

さすがにゼクストが反論しようとする

「おお！格好いいなそれ！」

マールが乗っかってしまい、出来なくなった。

二人は一層盛り上がり、ゼクストは一気に蚊帳の外となった。時おり聞こえてくる『ハイパーブラックマン』だの『真つ黒々助』だのといったネーミングに敵ながら同情を禁じ得ないな〜か思っている

ると、黙っていた（普段からだ）サリアが

「……アーヴィング」

と呟くと、水を打ったかのように静まった。それもその筈、サリアが自発的に声を発するのは極めて稀……というより初である。

マール達よりサリアと付き合いの長いソルエルもかなり驚いていることから、ソルエルも初めて聞いたんじゃないだろうか。

サリアは今まで、周囲の強い要望がなければ話すことはなかった。それが……

「え……あ……アーヴィング？……がいいのか？」

「……うん……私は……それが……いい……と思う……」

「……うえッ！？」

酷い時には土下座までしてようやく単語が一言一言だったあのサリアが、主語・動詞・目的語揃った成文を口にするとという異常事態。

「さて、アーヴィングの動向についてだが」

今でこそ落ち着いているが、あ後は酷いものだった。というかソルエル一人が騒いでいるだけだったが。

「てんぺんちいのまえぶれだー！」とか「なんであんなやるーのためにー！」とか五月蠅いことこの上なかったが、お馴染みサリアの一撃でカタがついた。

名前はアーヴィングで満場一致であったことは言うまでもない。

「とういうわけで、戦乱の雰囲気濃い所をまわり、探すこととする」
話がまとまったようだ。

「それでは、出発する！まずは北の大国、シエルジエだ！」

始動（後書き）

うん…アップが遅すぎる

しかも出してから気付いたけど二話のラストの切れ方おかしいだろ
！うわーん！

他にもツッコミ所満載でお届けする「憎しみの世界平和」存分に突
っ込んでください！もっと奥まで！（ここで下ネタって…俺なんか
死ねばいいと思う）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6665m/>

憎しみの世界平和

2010年10月15日08時13分発行